



絆・ベルリン

第4回「翼・プロジェクト」報告
(2016年8月2日～8月10日)

日本語での抄訳

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副理事長

はじめに

2016年8月2日から8月10日まで、津波と大地震に被災した岩手県に住んでいる6人の高校生が 絆・ベルリンの招待で、8日間ベルリンに来ました。

この滞在の目的は他の国を知ることと、ドイツ人の若者との交流でした。更に、高校生に復興についての刺激を与えるために、いろいろなプロジェクトを見学しました。重点は再生可能エネルギーや市民参加、オーガニック・フードなどでした。

絆・ベルリンは第4回の「翼・プロジェクト」をNPO・遠野まごころネット（TMN）と共同で行いました。

ドイツのロベルト・ボッシュ財団から、今年の「翼・プロジェクト」に約1万ユーロの財政援助がありました。4度目の財政援助でした。我々はボッシュ財団に本当に心から感謝しています。

後援者は在ドイツ日本国大使館と岩手県教育委員会、それに様々な岩手県のテレビ局と新聞でした。

そして、たくさんの個人的に寄付してくださった方々にも感謝しています。今年は日本からドイツ国への航空運賃は円為替とともに上昇しました。個人の寄付者のお陰で、物価上昇の影響を和らげることができました。

TMNが4月初めに岩手県のメディアを使って、公募を開始しました。14の町村から34人の高校生が公募に応募しました。4月30日の応募申込期限の後で、TMNが1次審査（書類審査）し、20人の女子高校生と4人の男子高校生が書類選考で選ばれました。5月の14日に、遠野市民センターでその24人から、5人の女子高校生と1人の男子高校生が選ばれました。

高校生はそれぞれ15分間の面接を受けました。自己紹介の後で、応募動機などについての質問しました。英語の基礎知識は不可欠な前提でしたので、最後の5分間には、英語で簡単な質問をした。

6月～7月に高校生がTMNの指導でプロジェクトのオリエンテーションを4回受けました。岩手県被災地の現状を学び、その時に、陸前高田上長部にあるベルリン・ハウスも、大槌にあるコミュニティーセンターも訪問しました。同時に、彼らはドイツ現地でのプレゼンテーションの準備を進めてきました。

ベルリン滞在中に、高校生はドイツ人家庭で6日間ホームステイしました。そして、2泊3日のワークキャンプがありました。更に、ベルリンの市内史跡を観光し、多彩な訪問をし、催し物の開催に力をかけました。

ベルリンの市庁舎や在ドイツ日本国大使館、DIMという障害者に適合している工場、再生可能エネルギーに取り組んでいる団体「UFA・FABRIK」、タケ自転車工場、都会と田舎の協同のオーガニックフード・プロジェクトなどを訪問しました。「ベルリン・ターフェル（食べ物配布NPO）」では、約3時間ボランティア活動をしました。

「ろうそくの夜」と呼ばれてヒロシマ・ナガサキの被爆者の記念に追悼式にも、「ノーモアヒロシマ」という核戦争防止国際医師会議のためのチャリティ・コンサートも参加しました。

8月2日（火曜日）

今日の午後に、6人の高校生が無事にベルリンに到着しました。高校生は成人の担当者を2人同伴しました。一人がTMNスタッフもう一人は、日本に住んでいる絆・メンバーでした。



心のこもった歓迎のあいさつの後で、日本の高校生たちはホームステイ家族と一緒にそれぞれの家に行きました。

いつもながら、日本人の担当者は、絆・メンバーの家で6日間無料で泊まりました。

8月3日（水曜日）

ベルリンの市庁舎の案内、市内史跡観光

プログラムのはじめに、日本人とドイツ人の高校生と一緒に、ベルリン中央のミッテ地区にある「赤の市庁舎（Rotes Rathaus）」を訪問しました。

アレクサンダー広場近くに位置している赤の市庁舎はベルリンの市庁舎です。市長とベルリン市の行政組織の本拠地です。

目印となる建物の名前は赤い硬質煉瓦による見た目のデザインに由来しています。鮮やかな赤色のレンガでネオルネサンス様式のファサードが19世紀に造られています。

この市庁舎は、第二次世界大戦の爆撃による大きな被害の後で細部にまでこだわって再建されました。ベルリン議会の東西分割と再統合も目撃しており、歴史が感じられます。



まず、外務担当者の Petra Schwarz 氏が私たち心をこめて迎えてくれました。彼女は東京とベルリンの姉妹都市の担当者です。その後で、ピラーホール (Säulenhalle) に会合しました。絆の Brigitte Brose さんが導入の言葉を述べました。そして、週間の日程を説明しました。絆の小林亜未さんは日本語で訳しました。



ちなみに、円柱のあるピラーホールは市庁舎で最も美しい部屋です。高さ 9 m のオレンジ色の天井が目を引きまます。そして、この広間にはドイツの歴史の中で重要な人たちの胸像が展示されています。



次いで、美術史家のベティーナ・グルドナーさんが私たちにベルリンの歴史を教えながら、市庁舎を案内してくれました。大きな宴会場（Großer Festsaal）や紋章の広間（Wappensaal）などを見に行きました。宴会場は市のレセプションや儀式が頻繁に開催されています。Wappensaal では彼女がいろいろなベルリン区の紋章を説明しました。



最後、市庁舎の食堂で 昼飯をとりました。グループ写真の後で、市内史跡を観光しました。

旧市内を約3時間歩回りました。ニコライ地区からフンボルト大学区やベルリン城を経て、ブランデンブルグ門とベルリンの壁記念碑に行きました。



ニコライ地区



ベルリン城の復興

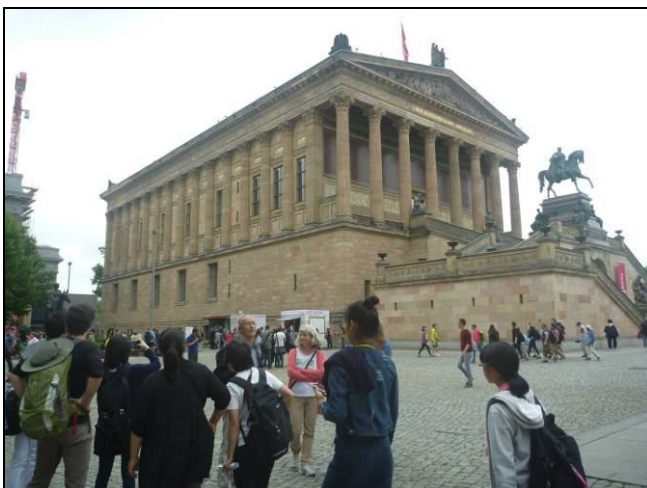
ベルリン城は1701年から1871年までプロイセン王国国王の居城でした。その後、ドイツ帝国皇帝の居城でした。1918年のドイツ革命で君主制が滅びて以来、王宮は博物館として利用されてきましたが、1945年の米英軍の空襲で半壊しました。

共産主義の政府が封建主義のシンボルを憎みましたから、残念なことに、1950年に、ベルリン城は東ドイツ政府によって取り壊されました。

でも、ドイツ再統一以来、多数の人が参加してベルリン城の再建についての論議をしました。その結果、連邦政府は2010年にベルリン王宮の再建を決定しました。

再建は本当に急速な発達を遂げています。2015年6月に棟上げ式が行われました。

大きな建築物で、広さはサッカー場三つ分にもなります。内部は現代建築ですが、王宮のファサードの外観がもとのとおりに再現されています。完成は2019年を予定しているそうです。



博物館の島



ブランデンブルグ門の前に

私は、ベルリンの壁があった時代を体験しましたので、ブランデンブルグ門の前で冷たい戦争の時代について、説明することができました。私は生まれてからこれまで、ずっとベルリンに住んでいるので、この目でベルリン壁の建設と崩壊を目撃しました。そこで、高校生は、実際の体験者から話を聞いたので興味がわいたといいました。

ウンター・デン・リンデン通りをたどって進んだ時、戦争と圧制の犠牲者のためのドイツ連邦政府の中央追悼施設も訪問しました。その追悼施設はノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache「新衛兵所」）と呼ばれています。その1819年に建てられた建物は1993年に戦没者のために再び奉献しました。



ノイエ・ヴァッヘ



ホロコースト記念碑

そして、ナチ政権下のドイツ歴史の暗黒面を忘れないために、ホロコースト記念碑とよばれている「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」とティアガルテン公園にある「ナチス・ドイツによって迫害を受け殺された同性愛者たちの慰霊碑」も見に行きました。



同性愛者たちの慰霊碑



Global Stone Projekt

最後に、彫刻師のシュバルツエンフェルド氏の「Global Stone Projekt（グローバル・ストーン・プロジェクト）」も観光しました。彼は30年以上世界の5大陸からその大陸ながらの特徴のある石二対を探しました。一つはその石の故郷に記念碑として置いてもらい、もう一対はベルリンのティアガルテンの一角に設置しました。ストーン・プロジェクトの5つの石は「平和」に不可欠な5つのステップの象徴です。ヨーロッパはAwakening（目覚め）、アフリカはHope（希望）、アジアはForgiveness（寛大）、アメリカはLove（愛）、オーストラリアはPeace（平和です）。毎年夏至に、全部の石と石を一つの太陽の光線で結ぶんでいるので、世界の平和のシンボルです。

8月4日（木曜日）

UFA・FABRIKの案内

今日の午前、ベルリン南部のテンペルホーフ地区に ufa-Fabrik（ウーファー・ファブリーク）という文化とエコロジーのためのセンターを訪問しました。周辺環境は半分は住宅地、半分は産業地ですが、ufa-Fabrikが「Urban-Village（都市の中の村づくり）」なので、本当に著しいプロジェクトです。

入り口で、物理学士の Werner Wiatalla 氏が私たちに ufa-Fabrik の歴史と基本理念の初歩を教えてくださいました。

彼は学際的研究に従事しています。専門分野はエコロジーと経済と社会的環境を均等に結合しています。

ufa-Fabrik では Wiatalla 氏は屋上緑化と再生可能なエネルギー、雨水利用の担当です。そして、彼は ufa-Fabrik の雨水コンセプト（分散型雨水貯留技術）を考案しました。

総合的な解説の後で、彼は私たちにいろいろなところを案内してくれました。約2時間の案内でした。



もともとその地域は UFA（Universum Film AG）・映画製作会社でした。廃業の後で、土地所有者は広い地面（約2ヘクタール）を1970年の半ばから遊ばせておきました。そして、市当局は新しい団地と高速道路を建てるために全部の古い家を取り壊す計画を立てていました。

しかし、1979年にたくさんの若者たち（アーティスト、学生、技術者など）が利用されていない敷地に集って、3日間のオルタナティブ・カルチャー（Alternative Kultur）のフェスティバルを催し、古い建物を平和的に不法占拠しました。

1980年に、市当局は敷地の占拠を合法化しました。それ以来、「社会の持続可能な発展」（sustainable development）をモットーに、都心部に住む人々が、文化や創造力と共に豊かな生活を営む事ができる場を作りました。

その間に、アーティスト、文化、エコロジーと国際交流のためのセンターが作られました。そして、現在、30人が ufa-Fabrik に住んでいるが、200人もスタッフが働く大きな組織になっています。

ufa-Fabrik の最大の特徴は、文化の育成とエコロジー、経済、社会福祉を統一体と見なします。パフォーミングアーツの活動に加え、子供のサーカススクール、道場、小学生のフリースクール、社会福祉センター、ゲストハウス、オーガニックパン屋、カフェ、エコショップが同じ敷地内で運営されています。パン屋やカフェ、スクールの運営は重要な収入源となっています。アートプログラムは、ダンス、演劇、コメディ、音楽などパフォーミングアーツが中心となっています。



また、敷地内には緑の屋根、ソーラー発電や風力発電の採用、雨水と排水をトイレや農業用水に再利用するなど、エコロジーシステムも完備されています。
Wiatalla 氏のご案内で、分散電源も屋上緑化と雨水処理施設も説明しました。

ufa-Fabrik は電力と熱をほぼ自給しています。地域発電のために、1980年の前半に、小型のコージェネレーションプラント装置「ドイツ語: Blockheizkraftwerk (BHKW)」が開設されました。

その時代には ufa-Fabrik は地域発電の新領域を開きました。ベルリンでははじめて建てられてBHKWでした。1994年に、コンピューターで制御されたBHKWを2台取り付けました。その設備は電力需要の75パーセントをカバーしています。

毎時に88kWh(キロワット・アワー)と190kWh熱エネルギーです。そのほかに、60kWの太陽光と風力発電設備が屋根の上にあります。



屋根に取りつけたソーラーパネル

ちなみに、発電が ufa-Fabrik での需要を上まわると、ベルリンの電気会社はその電力を買い上げています。法的根拠は1990年の「再生可能エネルギーから生産した電力の公共系統への供給に関する法律」です。



屋上緑化 と 太陽光発電装置



3層式植物利用浄化槽科

灌漑とトイレのために、ufa-Fabrik が1年当たり3000立方メートルの水を使っています。1990年の前半から、飲み水の浪費を減らすために、雨水処理施設が作動中です。屋根と舗装道から雨水がタンクに集まって、段階的に浄化しちます。3層式植物利用浄化槽科で、灌漑とトイレの水は100パーセント浄化された雨水です。

ufa-Fabrik ではたくさんの屋根は緑でおおっています。緑化された屋根は総面積4000㎡です。屋上緑化には多くの利点があります。建物の断熱と消音が向上しています。そして、都市におけるヒートアイランド化が進行している中において、緑化によるCO2削減効果や温熱環境改善効果は大きいです。4000㎡当たりでは年に約20トンCO2を吸収します。さらに、塵削減効果も大きいです。大気中にある塵を2トン年に蓄積します。また、保水力が高いです。屋上緑化は雨水を集め、ろ過し、貯水し、その後25パーセントだけ放出するものです。75パーセントの雨水が蒸発しています。豪雨の時などに、下水道の水があふれ出す危険が減っています。

ほかの研究分野はサステイナブル建築です。一昨年、学生グループは Wiatalla 氏の指導のもとに藁葺きの家が建てられました。持続可能建築の実験的実施プロジェクトです。自然素材の最少使用で建てられたエコ建築です。

基本素材は藁梱「ドイツ語: Strohhallen (ストローベイル)」です。藁梱は収穫後の植物の乾燥した残り物です。好ましい藁はオート麦や大麦ですが、どんな種類の藁でも作ることができます。藁の茎にある繊維が少なければ少ないほど良いです。藁梱ブロックを積み上げ、練土を噴射して土壁を作ります。

断熱性が良いなので、低エネルギーハウスです。さらに、耐震構造だそうです。



要約すれば、ufa-Fabrik は持続可能な地域の実現に向けた環境行動点拠についての良い手本だと言うことができます。

ufa-Fabrik の最大の特徴は、文化活動と社会事業をエコロジーと経済と関連づけます。持続可能なライフスタイルとビジネス手法を求めて、社会の文化的責任をも浮かび上がらせます。その発足時から人々の平和的共存のための基礎として、文化への積極的参加を支援し、促進することにあります。

ドイツは、福島原発事故の後で世界で初めて再生可能エネルギーへのエネルギー大転換を決定した国です。しかし、この関連において、忘れてならないのはたくさんの環境保護と環境工学開発のために全力を尽くす人々がすでに長年にわたり基礎研究にいそしみ、実地に応用しています。

大使公邸でのレセプション

8月4日の午後に、高校生が日本大使館を在ドイツ特命全権大使の八木毅さんの招待で訪問しました。



八木毅さんとのグループ写真

日本の高校生たちは、自分たちの学校の制服を着て行きました。二人が挨拶した後で高校生は英語でのパワーポイント・プレゼンテーションをしました。



在ドイツ特命全権大使の八木毅



絆・ベルリンの Frank Brose



全員の自己紹介の後で、高校生が一人ひとり自分のことを話しました。

＊ 佐々木朱理さんがプロジェクトへの参加に感謝しました。ドイツ人たちに古里の現状を伝えることができるからです。東日本大震災の記憶を風化させないことについて、チャンスだと述べました。ドイツ人はそのことを忘れないと信じています。

＊ 佐藤ゆららが本大震災の5年後に、多くの被災地は、まだ復興していません、被災者の心を癒すのにも、とても長くかかると言いました。被災地の人々を元気にするために、まずは若者を元気になってもらおうと考え、翼メンバーが提案した、岩手の中の学生団体をサポートする仕組みについて話しました。

* 高金 理沙さんが仮設住宅での苦しい生活に報告しました。
狭苦しいところで暮らすので、大人も子供も不断のストレスにさらされています。

復興が長期間かかるので、過疎化がまだ問題です。とりわけ若者たちが故郷の町を引き払い東京などに移り住んでいます。そして、老人たちが孤独に悩んでいるのです。

前向きな将来を展望するために、被災地では新しい職場が創出されなければなりません。

多くの新しい職場が最も重要なことだと思います。



* 笹原 爽志さんがSYM (Sparkle Youth Miyago) と呼ばれている高校生自主活動グループについて報告しました。

SYM (Sparkle=輝く、活がある、Youth=若者、Miyako=宮古) は2015年の秋に彼の故郷の宮古市で結成されました。団体を発足して0ヶ月が経ちメンバーはもう30人を超えました。

宮古は津波で大きな被害を受けた。しかし、高校生は震災が街を変えるきっかけをくれたかもしれないと思っています。そして、若い世代が震災の教訓を継承しようと動きだしています。

高校生グループのSYMは宮古を元気にしようと活動しています。被災地支援や防災、世代間交流のテーマで現在は活動をしています。たとえば、街歩きでは危険箇所を見つけました。そして、仮設住宅を訪問しています。

今年の2月に、初めてのチャリティコンサート、3月から今までに世代間交流の会を催しました。SYM・チャリティコンサートは客を180人呼びました。いろいろなイベントでは自分で作った郷土料理を売れました。

既存のイベントにボランティアやブース出店などで多くの経験を積んできました。そのような考えをもつ若者が増え少しでも人口流出は減り10~20年後の未来の宮古は明るい街になっていくと信じていると言いました。

* 黒澤 望愛さんが東日本大震災について、外国で広く語られている間違っただけの考えがたくさんあると言いました。外国の視点からは東日本大震災が福島原発事故ばかりです。しかし、最悪の破壊は岩手県と宮城県の海岸で起きました。さらに、大多数の死傷者も三陸海岸で出しました。（2011年3月11日に約14,000人が死亡です。そして、2,300人が行方不明です。）それで、翼・プロジェクトはドイツ人に被災地の現在の状況について詳細に報告するための良い機会だと思います。

* 被災地の復興を手伝うについて、鈴木 文香さんがいろいろな可能性をまとめました。そして、ボランティア活動は今でも大切だと説明しました。学生と高校生の活動も重要な要素です。地元高校生グループは資金を必要としており、寄付の配分先などについても協力したいと考えています。東日本大震災に関する報告を多くの人に広めて欲しいと考えています。インターネットなどにも書いてくださいと言いました。

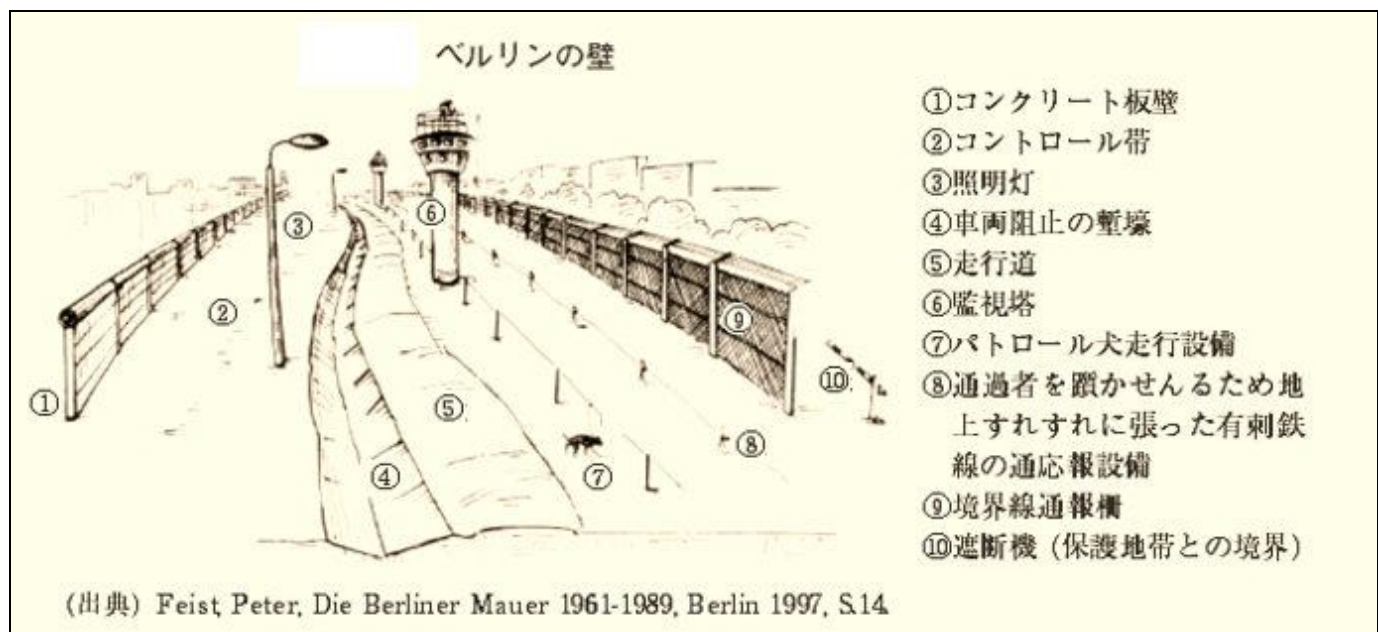
プレゼンテーションの後、皆さんが立食レセプションに招かれ、食べながら活発な会話をしました。

8月5日（金曜日）

今日はベルリンの壁からタケ自転車工場、オーガニック食品市場、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の記念碑をまわる変化に富んだ日程でした。

ベルリンの壁、イーストサイドギャラリー（East Side Gallery）

朝の市内観光の重点はベルリンの壁の歴史でした。集合場所はクロイツベルク地区のSchlesisches Torと言う地下鉄駅でした。そこからシュプレー川の西岸に沿って歩きながら、壁建設から壁崩壊までの歴史を学びました。川をまたいでいるオーバーバウム橋（Oberbaumbrücke）を渡り、東岸にあるイーストサイドギャラリーへ行きました。



1961年8月に建設が始まったベルリンの壁は、28年も経った後、1989年11月9日に崩壊しました。そして、その一年後に、東西ドイツは再統一されます。

1961年8月13日にベルリンの壁の建設が始まりました。その日から引き続いて、28年間、西ベルリンを取り囲むように周囲に壁と鉄条網をめぐるしました。鉄の棒で補強したコンクリート製で壁は高さ3.6メートルで、長さ約155キロメートルぐらいでした。

壁建設から壁崩壊年までの間に、壁を越えて西ベルリンへ逃れようとした239人ぐらいが殺されてしまいました。そのその当時、5075人の人が脱出に成功しました。壁の建設の最初の日、1000人ぐらいがすぐ逃げました（1961年から1989年まで、東西の内側のドイツとの国境では合計で938人が殺されてしまいました。）。

ドイツ再統一の流れの中で、壁の崩壊は明白な政治的意志だったので、壁は市内のごく一部を除いて、完全に姿を消しました*。

今では、市内に3ヶ所だけ壁がまだ保存されています。そのうちのひとつが、全長1,3キロメートルに及ぶ「イーストサイドギャラリー」です。



その地域にはドイツ分割の時代に東西ドイツの国境はシュプレー川の西岸に沿って走っていました。それで、ベルリンの壁は川の東岸の裏手でソビエト占領地区(東ベルリン)の内側に立てられた。壁と東岸の間に Todesstreifen (死の危険のある立ち入り禁止地帯)がありました。川に飛び込んでも対岸にたどり着く前に捕まるか射殺される例がほとんどでした。ここには全部で14人の人が溺死したか射殺されてしまいました。

* 壁の崩壊の知らせにたくさんの日本人も歓喜しました。日本全国約、2万人以上が「桜キャンペーン」により募金して、1990年から今まで、1万桜の木を元壁のあった12カ所へ植えました。

1990年の東西ドイツ統一後、21カ国から来た181人のアーティストたちがベルリンに集まって、壁の歴史とその犠牲者を忘れないために、ベルリン・壁に壁画をたくさん描きました。アーティストたちの提案でのプロジェクトでした。その後、そのところはイーストサイドギャラリーと呼ばれて、今まで世界中に知られている観光名所にもなっています。

しかし、風雨にさらされるため、壁はすでに風化して、ぼろぼろの壁の表面からは、壁画が剥落しはじめていました。幸い、アーティストたちのイニシアティブで、修復工事の呼びかけが行われ、連邦当局、ベルリン市、EUなどから、250万ユーロあまりの募金が寄せられました。

2009年6月に、まず、かさ石を改築し、壁の表面を削り取る作業が始まり、その後、壁の表面はすべて白く塗られました。

そして、当時絵を描いたアーティストたちを招いて、きれいになった壁に、同じ絵を描いてもらいます。7月から、彼らが再び作品を描き始めました。10月までに絵の修復は全て終わりました。

2015年に、たくさんの落書きが壁にありましたので、アーティストたちがまた集まって、壁画を復旧しました。



一番有名な壁画は「兄弟のキス (Bruderkuss)」です。

Dmitry Vrubelの「神よ、この死に至る愛の中で我を生き延びさせ給え (My God, Help Me to Survive This Deadly Love)」は、旧ソビエト連邦の指導者 Leonid Brezhnev と東ドイツの指導者 Erich Honecker) の「兄弟のキス」を描いた有名な壁画です。

そして、イーストサイドギャラリーの中には、日本についての壁画もあります。その「日本地区への迂回路」という障壁画には、とてもおもしろい裏話があります。

絵には左右の壁の間に、日の丸を背景にして富士山と多重塔が描かれています。左側の絵には、白い立て看板があり「日本地区への迂回路」と日本語で書かれています。



それは、西側の壁に立てられていた「You Are Leaving The American Sector (アメリカ占有地出口)」の看板と形も、色や字も良く似ています。

その絵を描いたのは、ドイツ人の画家で、名前は **Thomas Klingenstein** 氏といます。彼は、1980年に19歳の時に、秘密警察スタージに国家反逆罪で逮捕され、1981年に東ドイツから西ドイツに強制出国させられました。その後、ベルリンやパリに住んだ後、1984年から1990年代半ばまで日本に住み、1995年からはベルリンに居を定めています。当時の日本での滞在を、彼はのちに、「芸術的修業と遍歴時代」と言っています。壁崩壊時にも彼は日本にいました。

では、その壁画の意味は何でしょう。ここを直進すれば日本に到着するというのでしょうか。当時の東ドイツ市民には、旅行の自由は与えられていなかったもので、遠い所に旅行することが、多くの人々の夢でした。**Thomas Klingenstein** 氏にとっては、遥かな日本が出国自由のシンボルであったと思います。

高校時代彼は日本に興味を持っていました。しかし、彼は自分の政治的な意見を発表したために、卒業後大学へ進学することができませんでした。彼は、インタビューで、「日本地区への迂回路」は、芸術的な美を求めた夢の回顧であると話しています。



イーストサイドギャラリーの裏に **WAR on WALL - Syria from Insight** というテンポラリーの写真展がありました。

長さ350メートルで、シリア人の戦争犠牲者と破壊された町の大きな型の写真が展示されています。

そのひどい写真を見ると、皆さんを考え込みました。

タケ自転車工場 "OZON Cyclery"

次は、日本人とドイツ人の高校生と一緒に竹製自転車の工場を見学しました。電車でイーストサイドギャラリーからそのベリリン・リヒテンベルグにある工場に行きました。

竹製自転車の工場の名前は「O z o n C y c l e r y」です。スタートアップ (s t a r t u p) の企業です。

いいアイデアとやる気はある若者たちが企業を起こしました。創業資金はあまりありませんが、彼らはその仕事に精力を傾けています。

この工場では竹製自転車を製作しています。竹製自転車とはフレーム部分を竹で作った自転車です。また顧客が技術者の指導のもとに竹製自転車を自分で組み立てることもできます。

竹製自転車はいつもカスタムメイドで、身長と足の長さをもとに作られます。起業者たちはフレームを組み立てるための新しい工具を開発しました。それは安く生産できて、いままでの工具を改良して作りました。

そして彼らは特許を申請しませんでした。多くの人のために使ってもらうために、設計図をオープンソースとして公開しました。

会社の創立者と事務長の Daniel Vogel-Essex さん（左の写真右）が私たちに O z o n チームのビジョンを教えていました。



Vogel-Essex さんは工業デザイナーです。整形外科技師の Stefan Brüning さんと一緒に 2009年に初めての竹製自転車プロトタイプを開発しました。それ以来、竹製自転車の型式は進む一方です。サイクル・メッセンジャーがいつでも耐久テストをします。

竹製自転車のほうが普通の自転車より多くの利点があります。

* 竹は、従来のフレーム素材よりも環境により優しいと考えられる素材です。また、持続可能性があると考えられている素材です。

竹は大気中の二酸化炭素を固定しながら成長するため、竹の利用はカーボンニュートラルです（二酸化炭素を排出しません）。

* 振動吸収性が素晴らしいです。振動の軽減は自転車に最も適した特徴の一つで、竹は滑らかで快適な乗り心地を提供します。

* 竹製の自転車は金属製のものよりも丈夫で長持ちすると言われていています。竹は、自然の恵みを生かしたりサイクル可能な素材であり、金属や炭素繊維（カーボンファイバー）の材料とは異なり、収穫や製造過程で多大なエネルギーを必要としません。

* 竹は強度が高いので、荷運び用自転車（カーゴバイク）を作るためによく使われます。ドイツ語で「Lastenfahrradか Transportfahrrad」と呼ばれています。100キロ以上の重さに耐えることができます。

高校生の一人がその竹製自転車に試乗することができました。彼女は本当にとっても上手に竹製自転車に乗りました。



Markthalle Neun (市場用のホール 第9号)

次はクロイツベルク市区にある「Markthalle Neun (マルクトハレ・ノイン)」というインドアマーケットホールを見学しました。

その見学の焦点は市民運動、一つの場所での生活と作業、オーガニック食品、都会と田舎の連携でした。

ベルリンの人口が急増した19世紀末、この街には14の屋内市場が立て続けに建てられました。屋外の市場が主流だった当時、衛生面、また雨から商品を守れるという利点からも、マルクトハレはたちまち市民生活に浸透したのです。1891年に開業した「マルクトハレ・ノイン」はベルリンに建てられた14の大きな屋内市場の一つです(ノインは9番目という意味です)。

戦災を経て、現在まで生き残っているマルクトハレは市内で4つしかありません。年月がたつうちに、百貨店やスーパーマーケットとの価格競争についていけない市場が衰退していきました。それで、売上高が減少して、マルクトハレが寂れました。

歴史の荒波を超えて2011年に、今の新しいコンセプトのもと生まれ変わりました。もともとの所有者であったベルリン市が、このマーケットホールを売りに出しました。その際、活用法についてコンセプト案のコンペがありました。資本力のある不動産会社が古い建物を取り払い、ショッピング・センターと地下駐車場を建てるつもりでした。住民はそれに反対でした。ベルリンの人たちは利潤追求だけではなく、環境面も大事にしようとしたのです。現在の運営者3人組の案が不動産会社の案に対して戦って勝ちました。その才能を表現出来る「みんなのためのマーケット」空間を作り出しているわけです。彼らのコンセプトは、地元産の新鮮で美味しい有機野菜や食材、食品を扱う地産地消型のマーケットホ

ールです。コンセプトの重要な要素は、屋内市場のほうがショッピング・センターより多くの新しい価値を生み出した。そのコンセプトはクロイツベルク市区に住む人々の望みでした。

以前まで市場だったところを2011年に改装して、今の魅力的な形で復活しています。現在、市が立つ日には50の小売店で200人以上の人が働いています。色々な料理が楽しめるお店が入って、建物の真ん中の広いスペースにはイスやテーブルが並び、買ったものを食べられるフードコート形式になっているのです。

市の立つ日が週に3回あります（火、金、土）。毎週木曜日には、「ストリートフード・マーケット」というイベントが開かれます。

屋台村がイメージコンセプトで、多国籍料理のスタンドが50ほど並んでいます。ストリートフード・マーケットの日は千客万来です。主催者によると、訪れる人の数は大抵6000人ぐらいだそうです。



また、年に4回開催される「ハンドメイド・マルクト」では、手作りのオーナメントやファッション、コスメ、セラミック製品が販売され、人気を集めています。

そして、「ベルリン・ナッシュマルクト」というスウィーツフェスティバルが年に4回開催されます。

マルクトハレ・ノインでは、すべての市場屋台の根本原理は体に良い食生活、生産者の保護を促進するフェアトレード、環境を考えた持続可能な農法、地元の経済を優先する地産地消だと言うことができます。

日本人の高校生と一緒に3軒の市場屋台を訪問しました。



＊「Uckermark-Schaufenster（ウッカーマルクのショー・ウインドー）」という屋台では地域産や季節もののオーガニック食品が売られています。チーズと様々な乳製品、ハム、ソーセージ、ビールやサイダー、ジュース、ジャム、紅茶、その他の珍味は生産者から直接仕入れます。本当に都会と田舎の連携です。



＊「Kumpel & Keule」という屋台は精肉店です。その「ガラスの精肉店」では肉屋の仕80事ぶりを眺めることができます。そして、全部の畜産物について、動物の自然放牧が保障されています。肉屋が肉切り包丁肉を切り分けることもソーセージをつくることも間近に観察することができます。



＊「Kame-Berlin」という日本のベーカリーショップの屋台も訪問しました。そこに、

新潟の田舎出身のパン職人の亀山さんと協力者がスタンドに、メロンパンやあんパン、おにぎらずなどを売りに出しています。全て、手作りとのこと。

彼らを案内した後、高校生は、自分で市場を見て回ることができました。

「Alte Feuerwache」コンベンションセンターの到着

見学ツアーの後で、高校生がバスでマルクトハレ・ノインから「Alte Feuerwache」というコンベンションセンターへ移動しました。そこで、次の2日に、高校生が6人のドイツ人の日本語を習っている学生と一緒にワークキャンプに参加しました。部屋割り後で、一同そろって夕食をとりました。そして、初めてみんなで自己紹介をしました。

「Nacht der Kerzen (ろうそくの夜)」ヒロシマ・ナガサキの被爆者の記念

午後9時に、日本人の高校生はドイツの学生と一緒に「世界平和の鐘」の前での「ろうそくの夜」に参加しました。ヒロシマ・ナガサキの被爆者の記念に追悼式でした。

ベルリンの中心部フリードリヒスハーゲン区（旧東ベルリン）の人民公園（Volkspark Friedrichshain）の池の側に、釣鐘堂があり、日本で創立された世界平和の鐘協会（World Peace Bell Association）から寄贈された世界平和の鐘が1989年からかかっています。

この釣鐘堂の管理、補修はベルリン市が責任を持っており日本国民との親睦の象徴として重要な施設の一つとなっています。毎年8月6日、広島に原爆投下された日には、日独平和フォーラムと IPPNW（International Physicians for the Prevention of Nuclear War、核戦争防止国際医師団）の呼びかけで、人々が鐘を鳴らし、平和の風船をとばし、核廃絶と世界平和を祈念しています。前もって、5日から6日にかけての夜に、ベルリン・平和平鐘協会（Friedensglockengesellschaft, Berlin）の呼びかけで、「ろうそくの夜」が行われました。



「平和の鐘」の考えは中川千代治氏に由来するものです。中川氏は自らも第二次世界大戦中ビルマ戦線にあって生死をさまよったので、彼が戦争の悲惨かの苦しい経験から平和の維持に役立たがっていました。

1950年2月、自分が戦場に携えた軍刀と26カ国の貨幣で铸造した「世界絶対平和万歳の鐘」を宇和島市の泰平寺に設置しました。

1954年、最初の世界平和の鐘
うい作り、ニューヨークの国連本部
の中庭に立てられました。その鐘は
65カ国からのコインを融解しまし
た。

現在、世界平和の鐘協会のイニシア
チブによって、16カ国で40鐘を
立てられています。そのうち 日本
国内で20以上の鐘があります。

ベルリンの平和の鐘は103カ国か
ら寄贈されたコインやメダルで作ら
れたものです。



日本人の高校生の一人、佐藤ゆららさんが感動的なスピーチをしました。福沢先生は左藤さんのスピーチをドイツ語に訳しました。

大多数の日本人々は悲惨な思い出について何も話そうとしないと伝えました。家庭内で、そのことについてもほとんど話しません。しかし、世界平和を保つために、歴史の暗い面に向き合い、過去の過ちから学ぶことが必要だと考えました。

いろいろな心を打つスピーチの後に、みんなで平和の鐘を鳴らしました。



8月6日（土曜日）

ワークキャンプ

8月6日の晩から7日の昼まで、ワークキャンプがありました。日本人の高校生と6人のドイツ人の日本語が上手である学生が参加しました。

もくろまれた目的はドイツ人の若者との交流でした。ドイツの学生と意見を交わしながら、日本人の高校生がドイツの討論文化を知ることが予定されています。

デート・コースは次のとおりです。団長の福沢啓臣先生とTMNの細川加奈子さんの挨拶の後で、津波の被災地について英語でのパワーポイント・プレゼンテーションと討論が行われました。プレゼンテーションのテーマは東日本大震災から5年を経ての復興の現状及び自分の体験と結論でした。

次に、日本人とドイツ人の若者と皆順々に個人プレゼンをしました。一人は約7分間プレゼンを発表しました。そして、約7分間の討論が行われました。プレゼンと討論の共通語は日本語でした。

個人プレゼンのテーマは「未来または将来（ドイツ語で"Zukunft"）」でした。日本人の高校生は自分の将来の計画か社会の未来について話しました。ドイツ人の学生は自分の興味に関連してテーマを選びました。



団体プレゼンテーション



笹原 爽志



Malin Winter



Christoph Fiedler

笹原 爽志さんは「2016年8月：東日本大震災と地域活性化」についてプレゼンをしました。復興について、学生と高校生が重要な役割を担っていると言いました。

Malin Winterさんのテーマは「ドイツにおける移民」で、Christoph Fiedlerさんのテーマは「将来を形成するフィクション」でした。



佐藤 ゆらら



Frederike Jordan

佐藤 ゆららさんは「LGBT との未来：誰もが暮らしやすい未来を目指して」について話しました。その個人プレゼンに引き続いて活発な討論が行われていました。



鈴木文香さん

鈴木文香さんは「岩手県の医療」について報告しました。

大惨害の経験から、彼女の考えでは、医療の改革が必要です。岩手県の大学では医学の本科がないことが欠点だと指摘しました。

Frederike Jordanさんのテーマは「未来への希望って何？」でした。

彼女は私たちの壊れやすい地球を未来にわたって保全されることを望んでいます。



コーヒードリンクに、佐々木朱里さんの16歳の誕生日を祝いました。彼女のホームステイ家族が立ち寄って、自家製のケーキをプレゼントしました。そして、気分転換に、音楽のインテルメッツォもありました。元オペラ歌手の Frauke Twork 氏が若者と一緒にドイツと日本の歌を歌いました。音楽は常に諸国の人々の心をつないでいます。



Frauke Twork と歌舞の運動



黒澤望愛

次の個人プレゼンは本当に適切でした。黒澤望愛さんのテーマは「音楽治療師を目指して」でした。



Turan Tashqin



高金里沙

次いで、Turan Tashqin さんが「風力発電の将来」について、Alexander Curras さんが「平等の将来」について、高金里沙さんは「食料自給率低下と震災の関係」について話しました。東日本大震災の時はそれに関しては怠慢だったと思われます。



山田ボヒネック 頼子



Alexander Curras

最後は、福沢啓臣先生が「ドイツ再生可能エネルギー」について、山田ボヒネック 頼子氏が「諸文化間のコミュニケーション」について講演をしました。

「ノーモアヒロシマ」のチャリティ・コンサート

8月6日の夜、シャルロテンブルグ市区にあるカイザー・ヴィルヘルム記念教会（Kaiser-Wilhelm-Gedächtniskirche）へ「ノーモアヒロシマ」と言うチャリティ・コンサートを聴きに行きました。71年前に（1945年8月6日）、米国により原子爆弾が広島に投下されました。原爆忌に際して、IPPNWのためのチャリティコンサート「ノーモアヒロシマ」を、ベルリンのヴィルヘルム記念教会にて開催された「IPPNW（International Physicians for the Prevention of Nuclear War）は核戦争防止国際医師会議です」。主催・共催はFiliaとIPPNW、ベルリン独日協会とヴィルヘルム記念教会です。後援は在ドイツ日本国大使館です。 絆・ベルリン、ベルリン日本商工会、ベルリン日独センターおよびその他の人々が協賛しました。

開催地は歴史的背景から選択されました。教会は第二次世界大戦中に、1943年11月23日のベルリン大空襲で一夜にして破壊されました。

1962年に、八角形の教会堂と六角形の幾何学的な塔が新たに建てられたが、塔の廃墟は戦争への警告碑として残されました。広島市の原爆ドームと同様に、ベルリンの空襲の悲惨さを伝えています。塔の廃墟は、廃墟になっている原爆ドームと異なり、時計台・記念ホールとして現在も使われています。



ベルリン独日協会副会長の竹谷 宗久氏が15歳の日系アメリカ人ピアニスト、Umi Garret をベルリンへ招待しました。



Umi Garret と竹谷 宗久

Umi Garret が素晴らしいピアノコンサートを開催しました。バッハ、モーツァルト、リストとショパンの楽曲を演奏しました。絶賛を博しました。400名以上のお客様が来たと思います。入場無料、IPPNW へのご寄付をお願いしました。



コンサートの後で、日本人の高校生は、教会の出口の所で寄付を集めました。寄付が約2500ユーロもの寄付を集めることができました。本当に素晴らしいです。



ちなみに、東日本大震災の2年前に、Umi Garret は被災地に行き、気仙沼と一ノ関、仙台の小学校でコンサートを開催しました。彼女は子どもたちに希望と勇気を与えたいと考えました。「絆・コンサート・ツアー」と呼ばれました。翼・メンバーは心から感動しました。

8月7日（日曜日）

ワークキャンプ、 第2回の日

午前、Nina Vikhrovaさんと佐々木朱里さんが「部活：一輪車」と「太陽光発電の将来」についての個人プレゼンをしました。



佐々木朱里



Hana Becker



Nina Vikhrova

個人プレゼン後で、外務省の Hana Becker 氏が独日交換留学についての演説をしました。最後は、ワークキャンプの全体総括をしました。参加者の皆さんはワークキャンプがまことに有益であったと伝えました。ドイツの人たちが活発に議論しあっていること ("ドイツの討論文化") は日本人の高校生に深い感銘を与えたので、彼らが帰国後その体験を語り、新しい思いを高校で実行に移したがついています。



11時半にワークキャンプを終了しました。ホームステイ家族は日本人の高校生を車で迎えに来ました。午後はホストファミリーと一緒に自由行動をとりました。

ブローゼ夫婦はTMNの細川加奈子さんと絆・ベルリンの廣瀬芙美子さんと一緒に車でポツダムの近くにあるウェルダー市に行きました。その地域にはドイツでの最北のぶどう園があります。

TMNは遠野ではぶどう園を去年から営んだので、我々がウェルダー地域に働いているぶどう栽培者の Lindicke さんと接触しました。

ヴィンヤードのメンテナンスなどについて、TMNと Lindicke との情報の交換を可能にすることが予定されました。



ベルリンの壁崩壊後に、Lindicke 家族がそのぶどう園を復興し、そのときから今まで経営しています。その間に、いろいろなぶどうの種類が栽培されています。



我々はぶどう園を見学しました。後で、ぶどう園の中にある小さな酒場にワインを一杯飲みながら、景色の美しさを楽しみました。

8月8日（月曜日）

午前中に、クロイツベルク市区にある「D I M (Die Imaginäre Manufaktur)」障害者のための工場を1時間半見学しました。

しかし、D I M訪問の前に、多文化的なクロイツベルクの歴史と日常生活について概説しました。集会所は「Kottbusser Tor」広場でした。そのところはクロイツベルグ市区のにぎやかな中央です。それに、社会問題の焦点 (sozialer Brennpunkt) もです。

ベルリンの壁があった頃、西ベルリンは飛び地になり、クロイツベルグは都心区から壁に沿った周縁地帯になってしまいました。暮らしにくい時だったので、ベルリンの企業および人口が減少してしまいました。西ドイツの労働力の不足を克服するために、連邦政府は外国人労働者を募集し始めました。

1950年代からイタリア、スペイン、ユーゴから労働者が移住して来ました。それでも足りなくて1960年代からトルコ系労働者を入れました。西ベルリンに彼らは、単身で来て企業の宿舎に住みながらジーメンスやボッシュなどの大企業の生産現場で働きました。その時代に西ドイツは「Wirtschaftswunder（経済の奇跡）」を謳歌しました。

外国人労働者は初めは労働者寮に住んでいましたが、1960の後半から家族を呼び寄せはじめました。その時、クロイツベルグでは19世紀の中ごろに建てられた貸家（Mietskasernen）がありました。古い家なので、トイレが外にあって、暖房は石炭ストーブしかありませんでした。設備はとても簡易で、ベルリン中心市街地で一番安いアパートなので、移民も若者もたくさんその安いアパートを借りていました。

しかし、1960年代の前半に、いくつもの住宅地区は西ベルリンの政府によって再開発区域と決まりました。新しい団地と高速道路を建設するために、古い家を取り壊すことになりました。理由は「面的再開発」でした。ベルリンでは10年以内に4万アパート（約1000戸の古い建物）を取り壊すことが決まりました。クロイツベルグでは7000アパート（約250戸の建物）の取り壊しが決まりました。

クロイツベルグの再開発区域の中央は「Kottbusser Tor」でした。そこで、1969年から1974年まで、2000戸のアパートは取り払われて、「NKZ（新しいクロイツベルグ・センター）」と呼ばれるとても不細工な建物群が建てられました。



1974年に落成したNKZ（上の写真右）が町並み保存地区（写真左）の外観を損ねています。

これは社会の混乱を招きました。再開発後の家賃の高騰や建築された住宅の単調性が批判されていました。さらに再開発地区とその近隣社会との断絶などのコミュニティの破壊などがほどなく顕在化してきました。

それで、市区に住んでいる若者や移民は部分改造に対して頑強に抵抗していました。とりわけ若者たちがクロイツベルグに集って、空き家を不法占拠しました。

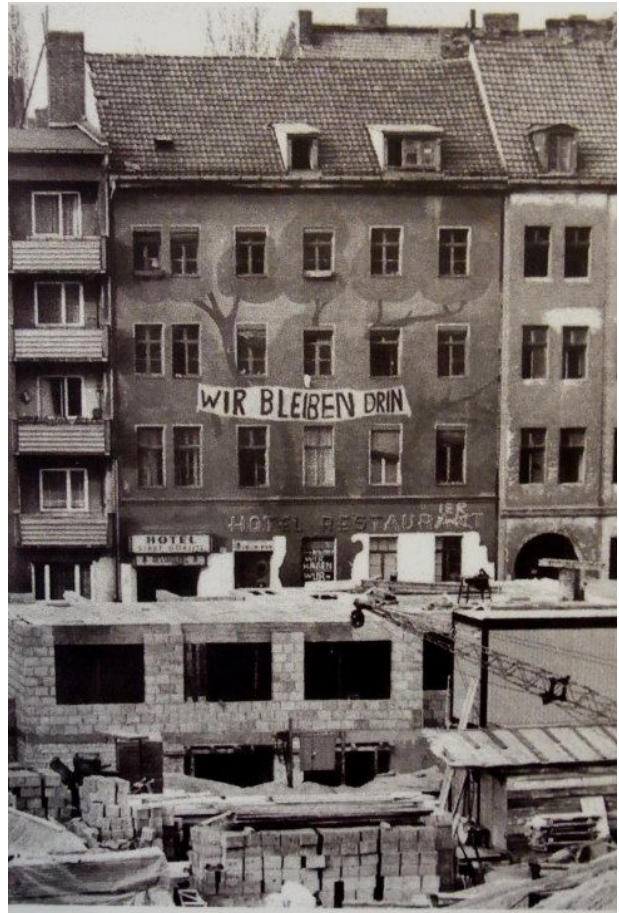
年ごとに、オルタナティブ・カルチャー (Alternative Kultur) のプロジェクトと家屋の不法占拠者・シーン (Hausbesetzer Szene) の数が多くなっています。

1981年に、165戸の貸し家を占拠し、居住者が占拠者と一緒にデモをたくさんしました。

政府も当初は機動隊による暴力で住民を排除しようとしていました。しかし、最後はアパートから出て行かなくて、非法占拠を続けることによってベルリン当局に再開発計画の見直しを認めさせたのです。

1984年に、50パーセントの占拠した建物が合法化されていました。

占拠者は家の所有者か市の行政と賃貸契約書を取り交わし、占拠・自助努力で家を直しました。運動が政治に威力を発揮しました。



1981年～1984年に不法占拠した家
「Wir bleiben drin = 我々はこちらに居続ける」
常に明確なメッセージでした。

西ドイツにおける都市再開発は、この間再開発の理念に著しい変化が見られるようになりました。歴史的建造物や環境の価値に対する見直しの機運が登場してきたのもこの頃でありました。

新しい構想が生まれました。内容は、建物の保存、修理、近代化措置（機能の更新）など個々の建物を対象として都市像の保全、住宅ストックの質的改善等に重点を置く「慎重な、保存的都市更新」という考え方でありました。

しかし、ドイツ再統一後、ベルリンは首都になりましたが、移転してしまった大企業の生産拠点はあまり戻って来ていません。

それで、クロイツベルグの移民の失業率は70%を超えています（この地区全人民の失業率は12%です）。また第一世代の高齢化が進み、高齢者の施設や介護も大きな課題となってきました。

クロイツベルグは壁に沿った周縁地帯から人気のある都心区に変わりましたので、家賃が高騰しはじめて、裕福な人が帰ってきました。

「D I M」 障害者のための工場の見学

「D I M (Die Imaginaere Manufaktur)」 障害者のための工場を1時間半見学しました。



まず、工場の経営者の Frank Schönfeld 氏が私たちを心をこめて迎えてくれて、会議室で概略を示しました。

今日見物した工場は100年前から盲人のための授産施設としてブラシ製造を行ってきました。

革靴が高価で一生物だった時代、多くの靴磨き用ブラシが必要とされていました。しかし、盲人施設の商品は時流とはだんだん相いれなくなりました。

1998年以來、盲人施設はデザインスタジオと共同して新製品をたくさん開発してきました。その人目を引く新製品はD I Mという商号で販売されています。

それ以來、旧盲人施設の所在地では、手作りのブラシ、千代紙和紙の箱、籐製品、陶器等の工芸品製作販売や籐いす等の修復を行っています。それは主として伝統的な職人芸です。D I Mは50人以上の障害者の工員をかかえています。身体障害者も精神障害者もいます。

2005年にD I MはUSE会社組織になりました。「USE (Union Sozialer Einrichtungen)」は350人の従業員と約750人の障害者(主に精神障害者)のパートナーを持つ社会企業EUと共同福祉協会の基金によって運営されています。

例えば、別の所では、子どものためのふれあい動物園を運営しています。そして、結婚式のためのケータリングサービス、ブライダルブーケやお祝いのビュッフェを提供しています。



概略の後で、D I Mの長い年にわたる協力者の Nesrin Tekin さんが案内役をしました。

いろいろな工作室を見に行きました。たとえば、籠細工(左の写真)やブラシ製造所を見学しました。

面白い製本所では日本の紙を加工しています。

ここで、多種多様の上質(メモ帳や箱、事務用品など)を作っています。



製本所（箱作り）

D I M会社訪問の目的も被災地に有益な情報を交換することです。2年前、大槌町の「大槌たすけあいセンター」の隣りに建設中だった「大槌みらい工房」の完成を祝い、竣工式を開催いたしました。

「絆・ベルリン」はあの陸前高田・上長部のベルリン・ハウスと同じようにこのプロジェクトを仲介しています。

建設にあたっては、ドイツのロバート・ボッシュ財団様からご支援を賜りました。財団が200,000ユーロを寄付してくれました。

ベルリンと大槌が交流を続けています。近い将来に日本とドイツの工場が互いに助け合うようになるかもしれません。

午後は高校生の自由時間でした。ドイツの若者と一緒にショッピングなどをしました。

8月9日（火曜日）

NPO ベルリン・ターフェル （NPO 入門とボランティア活動）

今日の午前は「ベルリン・ターフェル（食べ物配布NPO）」を訪問しました。集合場所は Beusselstraße の S バーン駅（近距離の電車）でした。

高校生が小林亜未さんと Gabriel Innes さんの案内で駅から広々とした青物市場

（Berliner Großmarkt）にある NPO 本部へ行きました。まず、「ベルリン・ターフェル」の PR 部の Sarah Richey 氏が私たち心をこめて迎えてくれて、会議室で NPO の目的を説明しました。

テーブルを意味する「ベルリン・ターフェル」の基本理念は、余った食材を廃棄する代わりにホームレスの人達と貧しい人達に分配できないだろうかという発想に基づいています。スーパーなどにある賞味期限が迫った食料品や前日に売れ残ったパンや市場で売れ残った果物や野菜、さらにはお祭りやバイキングで残った料理などがその対象です。こういった食材をボランティアが引き取りに行き、社会福祉施設に届け、そこで調理して分配するという訳です。

ホームレス支援機関も、一般の社会援助機関も「ターフェル」から食材の供給を受けています。そして、1ユーロという名目上の価格で袋に入った食料品をいろいろなところ（教会など）に配布しています。ちなみに、現在ドイツには、400を越える「ターフェル」があります。



ボランティア活動（くさったみかん、サラダ菜などをはねのける）

日本人の高校生はベルリン・ターフェルで2時間ほどボランティア活動をしました。



仕事を済ませた後で、昼ご飯を食べました。「ベルリンのカリーヴルスト (Curry・wurst)」で力を付けることができました。そして、食べ物の浪費について論じました。

さよならパーティ

午後6時から、さよならパーティが福澤先生の家で行われていました。出席者が40名以上いました。ホームステイ家族とワークキャンプは皆、パーティーに来てくれました。我々にとってうれしことに、日本大使館の佐久間里子氏とカニジウス校の梅津由美子先生も参加しました。近年のように今年も、「ダルマ」レストランの梅坂氏夫婦（岩手県出身）がうまい料理を提供しました。



絆・ベルリンの理事長の福澤先生と副理事長のブローゼ氏、日本大使館の佐久間子氏、TMNの細川加奈子さんはスピーチをしました。彼らは皆「今年の翼・プロジェクトは明らかに成功だった」と素直な喜びを述べていました。

8月10日～11日（水曜日、木曜日）

10日9時半に、日本人の高校生がテゲル空港からチューリッヒを経て、日本へ帰りました。本当によい時間だったので、涙ながらに別れました。11日7時半に、無事に東京へ着きました。



つらい別れ

レジュメ

第4回の翼・プロジェクトが大成功を収めたと思います。所期の目的を達成することができました。

* 日本人の高校生とドイツ人の若者は互いに相手をよく理解し合っていました。毎日、一緒にいろいろな活動しながら、お互いに親しくなることができました。ドイツの家庭にホームステイすることで、他の国の文化と社会についての認識をうることができました。訪独が両国人民の理解と友好を深めるのを確信しています。日本人の高校生の一人がドイツ語を勉強したがついています。そして、ドイツ若者の二人が来年日本へ旅したがついています。日本の高校交換留学プログラムの参加が予定されています。

* ワークキャンプのテーマは「未来または将来（ドイツ語で"Zukunft"）」でした。日本人の高校生は自分たちの将来計画や社会の未来について話しました。ドイツ人の学生は自分の興味があることについての展望に関して話しました（たとえば、風力発電の将来、平等の将来、移民、将来を形成するフィクション。ドイツ人と日本人の若者の間で、いろいろなテーマについての活発な議論が行われました。

参加者のみなさんはワークキャンプがまことに有益であったと伝えました。ドイツの人たちが活発に議論しあっていること("ドイツの討論文化")は日本人の高校生に深い感銘を与えたので、彼らが帰国後その体験を語り、新しい思いを高校で実行に移したがついています。

* 高校生に復興についての刺激を与えるために、いろいろなプロジェクトを見学しました。重点は再生可能エネルギーや市民参加、スタートアップ事業(新しいビジネスの創立)などでした。うれしことに、プログラムではたくさんのトピックが高校生の個人的な興味と一致しています。

* 高校生は歴史に興味をもっていました。ベルリン壁の建設と崩壊などについて、高校生は直接体験した人々からの話を聞くことができると、彼らの興味をかき立ていました。

ベルリンとでは古い建物と現代の建物がぎっしりと並んでいるのを見て、すっかり驚いていました。廃墟の中からよみがえって新しい家々が建りましたが、今でも、戦争の傷が残っています。古いものを保存しながら、それに現在のものを結び合わせているということは、高校生に深い感銘を与えました。

高校生は「過去に起きたことを忘れないが、楽天的に未来を見る」という考えを伝えていくべきだと言いました。災害後の復興が長くかかることは、わかっていますが、高校生は東北の復興についての希望を持つことができました。

絆・ベルリンは今年も「翼・プロジェクト」をNPO・遠野まごころネットと共同で行いました。本当に、緊密な協力のもとに行われました。

ドイツのロベルト・ボッシュ財団から、今年で4回目の「翼・プロジェクト」に1万ユーロの財政援助を受けました。そして、後援者は在ドイツ日本国大使館と岩手県教育委員会でした。後援者と支援者の皆様に本当に心から感謝しています。

経済事情の許す限り、絆・ベルリンは来年も「翼・プロジェクト」を続けるつもりです。

フランク・ブローゼ

ベルリン, 2016年11月9日